慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	福沢諭吉・慶應義塾関係新資料紹介
Sub Title	New materials : letters and manuscripts written by Fukuzawa Yukichi and records of Keio gijuku
Author	福沢研究センター(Fukuzawa kenkyū sentā)
Publisher	慶應義塾福沢研究センター
Publication year	2020
Jtitle	近代日本研究 (Bulletin of modern Japanese studies). Vol.36, (2019.) ,p.337- 349
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	資料紹介
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10005325-20190000-0337

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

福沢諭吉・慶應義塾関係新資料紹介

福沢研究センター

Ⅰ　福沢諭吉書簡

『福沢諭吉書簡集』（岩波書店　平成十三年～十五年　以下『書簡集』と略す）未掲載で、『近代日本研究』第三十五巻刊行以降見出された書簡を載録する。掲載は発信年月日順とし、体裁はすべて『書簡集』の形式に従った。詳しくは『書簡集』第一巻所収の凡例を参照されたい。なお、書簡番号は『書簡集』から『近代日本研究』第三十五巻まで通番で付された番号を追うものである。

凡例

一、常用漢字は、原則として現在使用されている字体を用いたが、慶應義塾など若干の固有名詞に、原文の字体を残した。

二、異体字、俗字、或いは書き誤りかと思われる文字は、正体に直した。

三、仮名づかいは、原則として原文のままとした。ただし、ひら仮名・かた仮名の判別がつかない場合は、かた仮名で表記した。

四、変体仮名はひら仮名に改めた。ただし、書簡において助詞として用いられている「は」「て」「え」は、原文の字形を残し、小活字右寄せで「ゟ」「而」「に」のように印刷した。原文が確認できない場合も、漢字の字体で表記されている「者」「而」「江」が助詞として使われている場合には、右の字体を用いた。

五、濁点・半濁点は原文のままとした。

六、合字は、使用頻度の高い〆（より）、〆（しめ）は原文の字形を残した。頻度の低い𛀁はトキ、𛀀はトモ、𛀁はコトと表記した。

七、句読点は、編者の判断により適宜補った。

八、執筆年月日や発信年月日などを推定でしか示すことができないものには、「カ」を付した。

九、脱落と思われる文字は、〔　〕を付して補った。

十、書簡については、本文の後に【　】を付して書簡の大意を示した。また封筒に関する事項は、書簡の理解に必要と判断されるもののみに限った。

十一、特に所蔵が記載されていないものは、福沢研究センターの所蔵である。

三六四九　柴原宗助　明治七（一八七四）年五月十八日

四月十四日並ニ五月七日両度之御手紙相達し拝見仕候。御家業御転移之模様等、棲〻之御細書拝承せり。追〻文学ハ盛ニ赴可申、書林ハよき御考付と存候。此方出版局之出張所も、大坂名古屋下ノ関ニ在り。大坂ハ心斎橋筋順度町なり。彼地へ御上りも候ハヽ、直ニ御引合被成可然存候。

写真御所望、易き事ニ御座候。則さし上候。実ハ当三月中ゟ老母大病、五月八日遂ニ死去、旁取込御報延引恐縮之至なり。若しよき機会もありて御出府相成候ハヽ、御立寄可被下候。右貴答、早〻頓首。

福沢諭吉

五月十八日

柴原宗助様

【柴原の書店開業をよき考えであると述べ、大阪に行った際には心斎橋筋順度町にある慶應義塾出版局の出張所と直接売買取引をするように伝え、所望された写真を送る】

○柴原宗助は慶應義塾に入学、あるいは特選塾員になった形跡はないが、福沢諭吉による明治十年以降の知友名簿によれば、「備中高梁」の人で「明十年十二月一日来状写真贈来」とある（『福沢諭吉全集』第十九巻、岩波書店、一九七一年、三三四頁）。この書簡の発信年は、文中に「当三月中ゟ老母大病、五月八日遂ニ死去」とあることから、明治七年であることがわかる。○この書簡は書幅仕立てになっていて、中村正直が福沢同様写真の所望に応える書簡と、書籍の取引等について書かれた木平譲の書簡が貼り込まれている。

三六五〇　宛名未詳　明治二十一年八月

七月下旬ゟ家族同伴鎌倉へ参り海水ニ浴し、本月十三日帰宅。二週之閑を偸みて、少ゝ養生へ可成候事と存候。滞留中ニ一首

曾是将軍開業城　群雄狂夢幾回驚　遊人不問千年事　唯愛水声山色清

御一笑可被下候

諭吉又白

【家族同伴の鎌倉での休暇を報告し、その際の漢詩を披露する】

○発信年は七月下旬に鎌倉を訪れていることから、明治二十一（一八八八）年と推測される。○福沢は避暑や海水浴のために、判明しているだけで生涯で五回ほど鎌倉を訪れている。明治二十一年は子どもたちを同伴し、七月十九日から長谷観音前にある三橋旅館に滞在した。同旅館は文化年間にはすでに旅宿を営んでいたといわれ、明治年間になると規模を拡大し、多くの有力者が逗留した。しかし東海道線が整備され、鎌倉―東京間の所要時間は二時間半から三時間余りとなったので、福沢はゆっくり休んでもいられず、七月三十日に一度東京へ戻り、堀越角次郎や平野理平にあって用事をすませ、再び八月三日鎌倉を訪れ、八月十三日まで滞在した。○漢詩は、幾多の武将が夢を追った往時には思いを馳せることなく、遊びに訪れている自分達は、今ただ景色の清々しさを愛していると詠んだもの。

以下の書簡は、『書簡集』掲載時には原本との校訂ができず、やむなく『福沢諭吉全集』再版（岩波書店、一九六九～一九七一年）から採録したが、このほど原本が判明し校訂作業を行うことができた。詳しい注についてはそれぞれ『書簡集』の各頁を参照されたい。

六五三　福沢英之助　明治十六年四月十八日

益御清適奉賀候。陳ハ明後二十日友人集会いたし度ニ付、午後四時御入来被下度、近来政談流行ニ付、拙宅ニ而ハ非政談之積、雪月花之御話ニ而一夕之歓を尽し度、何卒御差繰御出奉待候。早々頓首。

四月十八日　　諭　吉

英　之　助　様

【『書簡集』第三巻二〇〇～一頁】
○発信年は封筒消印より判明した。

［封筒表］横浜野毛町四丁目百六十弐番地　福沢英之助様　親展
［封筒裏］封　東京三田　福沢諭吉出

二四六四　益田英次　年未詳十二月四日

此生ハ安藤芹次郎と申、伊予之人なり。兼ゐ大坂住友之世話ニゐ東京修業中、今度本塾之大学ニ入学之志願、その資格如何可有之哉、一応御糺し被下度、則本人罷出候間、可然御取計奉願候。以上。

十二月四日　　諭　吉

益　田　様

【『書簡集』第九巻二〇八～九頁】

Ⅱ　福沢諭吉原稿

『時事新報』雑報欄に掲載されたと思われる原稿十一点を紹介する。いずれも福沢諭吉自筆である。「山名次郎氏」と「鉄道談の流行」は、明治二十六年十一月五日掲載の社説原稿「漁業法制定の必要」（『福沢諭吉全集』第十四巻、岩波書店、一九七〇年、一八六～九頁）と一緒に巻子に仕立てられていたもので、「漁業法制定の必要」は日原昌造の原稿に福沢が大幅に手をいれて、日原の論であると断ったうえで福沢の記名原稿としたものである。原稿冒頭には「伊藤」の丸印と、上部には植字の担当者かと思われる人名の墨書が何か所かある。「山名次郎氏」と「鉄道談の流行」はそれに続いて貼り込まれ、どちらも「石半検閲」（石川半次郎検閲の

意味か）の丸印、また「よしの」等の人名の墨書がある（貼り込みの際切断されてしまった部分がある）。升目のない用紙が使われている。

続いて「朝鮮人米国より帰る」からは、別の一本の巻子に貼り込まれ、これらの原稿のあとに、明治二十六年十二月二日に漫言として掲載された「悪縁契り深し」（前掲『福沢諭吉全集』第十四巻、二一二～三頁）が貼り込まれている。最初の二点および漫言原稿は升目のある紙に、「金玉均暗殺」からは升目のない紙に記されている。またそれぞれの原稿には、「花井」「津田」「人見」「岡村」「近藤」といった人名が墨書され（長文の場合は複数名）、「朝鮮人米国より帰る」と「日本の軍隊ニ加はらんと願ふ」には上部に「石半検閲」の丸印が、「金玉均暗殺」から最初の「日々新聞」までは「伊藤」の丸印（「超然主義ハ何処ニ在る」の印は不鮮明）が押されており、「見せぬ物ハ見えず」には印がなく（未掲載の可能性もあるが、墨書で「岡村」とあり）、最後の「日々新聞」には「石半検閲」の丸印、続いて貼り込まれている漫言原稿にも「石半検閲」の丸印が押されている。

二本の巻子とも、一緒に貼り込まれている漫言や社説の原稿は掲載日がわかっており、石川半次郎の勤務時期（発行および編集の名義上の責任者であった時期、明治二十七年十二月まで）などから掲載時期が特定可能かとも思われたが、現時点では決め手がなく探し出すことが出来ないままである。

○山名次郎氏　が近来九州地方を巡回して、時としてハ演説することもあるよしにて、二三の新聞紙にハ、時事新報の社員が各地にて政談演説をするとて、特ニ話したるものあり。新報社員ハ政談禁制と敢て誓を立てたるにもあらざれども、先づ昨今ハ演説の要用もなきゆゑ、社員中これが為めニ地方ニ出張したるものなし。

思ふニ山名氏ハ曾て本社員たりしの故を以て、右様の誤報もあることなる可し。

○鉄道談の流行　に付てハ、近来越後の直江津を起点とし、新潟より若松を経て郡山ニ達する一私線を計画し、資本金凡そ六百万円にて株主を募る。其中にも若し応募者の不足するときは、三菱社にて不足の分を何程にても引受るよし風聞ニ付、本社より特ニ三菱社へ聞合せたるに、何ぞ料らん同社にてハ夢にも知らぬことなりと云ふ。世の中にハ随分間違の多きものなり。

○朝鮮人米国より帰る　明治十七年の乱ニ日本へ逃れ来りし朝鮮人の中、その後米国ニ往きし者も少なからず。目下在来の人ハ徐光範、徐載弼を始めとして、林殷明、申応熙、鄭勲教等なりしが、今回林殷明は金俊竜と共ニ、米国郵船を以て帰途に就き、昨二十五日東京ニ着したり。徐光範、徐載弼も近々帰来す可しと云ふ。右林金両氏ハ幸便次第朝鮮へ帰る筈にて、東京逗留中ハ前年慶應義塾の学生たりし因縁を以て、三田福沢氏の宅ニ寄寓するよし。

○日本の軍隊ニ加はらんと願ふ　米国人の気軽なる今度日清兵を交ると聞き三百人五百人づゝ仲間を結んで、日本兵を助けんとて頻りニ奔走し、甚だしきハ在米日本公使館ニ申込む者もあるよし。固より日本にて承諾す可きことニあらざれバ唯一場の話ニ終る可きなれども、亦以て米国人が日本ニ対する感情如何を知るニ足る可し。

○金玉均暗殺　の事ハ久しき話にして、先年渡来して密計露顕したる池運永を始めとして、其後又李源競なる者も来り。尚ほ又何々何々とて毎度の事なるが、其内実の様子を聞くニ、朝鮮の貧乏士人等が生計ニ窮するの余り、金玉均の日本ニ居るを幸として、様々の説を作り、玉均ハ日本国にて同志と謀り、朝鮮ニ向て斯く〳〵の目論見ありと云ひ、或ハ同人ハ軍勢を催ほして朝鮮ニ攻入るの用意最中など、取ても付かぬことを密告して、先づ政府の筋の胆を潰させ、扨いよ〳〵夫れが事実か事実でないか、拙者が探偵仕らんと云へバ、即ち一廉の働者にて命を蒙れバ、旅費にもあり付き、又密告したる者ハ誠忠の臣にして、立身の道も開け暫時得意なる中ニ、馬脚の将さニ露はれんとする其機を見て逃るもあり。逃げそこなふて殺さるゝもあり。暫く中絶する又その中にハ、第二策を按する者あり。第三第四金玉均のあらん限りは、密告献策の止むときなく、恰も金氏を利用して一時凌ぎの生計ニする有様なりと云ふ。

○朝鮮国の権東重　なる壮士ハ、過般大坂の商業学校ニ入学したる同国の生徒と共ニ大坂ニ来遊し、揮毫などして日を消し居たりしが、今回俄ニ右の生徒ニ同伴して帰国したるよし。此壮士ハ兵曹判書閔泳駿の手の者にて、我国ニ羈居する金玉均の為めにハ中々恐ろしき客なり。閔氏の計画ハ凡そ此種の壮士十名を、日本の各地にぶら〳〵せしめ置き、何か大ニ為すことあらんとて、先づ其中の一名を差向けたりしニ、其風聞のバットなりしが為めニ、暫く中止したるものなりと云ふ。日本ハ無法律の国ニあらず、誠ニくだらぬ謀を運らすもの哉と或人の通信。

○東京日々新聞　の筆鋒荒くして罵詈悪口の言論を逞ふし、時として直ニ人身攻撃をも憚らざるハ、普く世人

の知る所にして此一点に於てハ、目下都鄙の諸新聞中ニ殆んど比類なきもの丶如し。然るに該新聞ハ現政府の元老某々の機関にして、之を管理する者ハ内閣書記官長伊東巳代治氏なりと云ふ。官員の身として公然新聞事業ニ与るハ、法の許さざる所なれバ、極めて秘密ならん。表面にハ事実なしと云ふことならん。或ハ取消せとも云ふことならんなれども、所謂表向の内証にして、天下の耳目ハ欺く可らず。左れバ吾々の眼中にハ、東京日々新聞なし。其紙上の言論ハ自から責の帰する所あるを認め、敢て故さらに此方より戦を挑まざるも、例の罵詈又ハ人身攻撃ニ逢ふときハ、一毫も假さずして之ニ答へ、其責任者の在る所を明にして、以て江湖の公評ニ訴へんと欲する者なり。

○超然主義ハ何処ニ在る　現政府ハ超然主義と称し、政党外ニ居るは無論。殊ニ議会ニ対しても、要用なき限りハ之を怒らしむることを為さず。一言一行も穏にして、相互ニ和せんと欲する者なりとハ、毎度風聞する所なるニ、爰ニ怪しむ可きハ、閣員某々の機関新聞紙が過激至極の言論を弄んで、恰も相手を択はず、世上一般ニ向て喧嘩を仕掛るの一事なり。されバ超然主義ハ唯表面の声言にして、内実ハ何か見る所あるや否や。

○官庇の下ニ売りたる　とハ全体何処の話しであるか。知らずバ知らして進ぜん。干渉の際日本国中の市町村役場ニ無代価で新聞紙を配達したる新聞社あり。是れハ売るニ非ず、進物にしたるものなりと云ふが、揚震ニ聞いて見るが宜かろふ。ヶ様な曲筆を運らし、漸く人身攻撃ニ及んで平気なるが如し。今両三回も試る中にハ、又候足元から鳥の奇談ある可し。

○日々新聞　の炤々乎たる事実ハ、朦朧として遂ニ分明ならず。分らぬ事ならバ分からずとして、強ひて窮問するにも及ばざるに、尚ほ朦朧の間ニ非を遂げんとするハ、余り大人気なきが如し。

○見せぬ者ハ見えず　炤々乎として明なる事実あるよしなれども、之を人ニ示さずして其耄を笑ふ無理なる注文かな。

○日々新聞　が遂ニ他人の口真似するニ至れり。議論も是れて終りなる可し。

Ⅲ　慶應義塾関係資料

『明治九年九月一日ヨリ十二月八日迄　慶應義塾学業勤惰表』

在学生の成績表である「慶應義塾学業勤惰表」（もしくは慶應義塾学業勤怠表）は、最も古いものが明治四（一八七一）年四月のもので、当初は毎月作成発行され、明治六年三月からは学期ごとになり、明治三十一年の第三学期まで発行された。その間、明治五年七月、明治五年十二月および明治九年九月から十二月分はこれまで発見されておらず、当該時期のものが発行されたのか否かも判明していなかった。今回はそのうち明治九年九月一日から十二月八日までの分を、福沢研究センターで入手することができた。形状は両面印刷の一枚物である。次頁に写真版で掲載する。

（西沢直子）

明治九年九月一日ヨリ十二月八日迄 慶應義塾學業勤惰表

凡例

一 表中第一層ノ出席割合トハ全出席ヲ一〇〇トシ其他ハ欠席ノ多寡ニ準シテ割合ヲ立タルモノナリ

一 第二層ノ算術割合トハ算術ノ問ニ答ヘタル數ヲ計算シテ全ク答ヘタルモノハ一〇〇トシ其他ハ之ニ準シテ割合ヲ立タルナリ又答數割合トアルハ算術ノ答數ノミニアラス他ノ請誦ノ點數ヲモ之ト合セテ割合ヲ立タルナリ

一 第三層ノ小試業割合トハ月々ノ試業ニ因テ得タル點數ヲ合計シテ一ヨリ百迄ニ割合ヲ立タルナリ

一 第四層ノ大試業割合トハ期末ノ大試業ニ得タル點數ヲ一ヨリ百迄ノ割合ニナシタルモノナリ

一 席順ハ第二第三第四層ノ割合ヲ合計シテ之ヲ定ムルナリ

第壹等

氏名	出席割合	算術割合	小試業割合	大試業割合
岡健太	一〇〇	一〇〇	九二	六九
津田茂理	九四	一〇〇	九二	六三
甲藤大器	九七	九〇	九〇	六八
柏田盛文	八七	七七	九〇	七三
鹿島秀嚮	八六	七九	八八	六三
岩永勝己	六七	六八	五七	七二
岩越重暢	六五	四一	八八	五八
岩野忠誠	六五	●	八八	五〇
辻九一	六六	八一	六二	●
森川順一	八五	二八	三八	●
北小路俊成	六五	●	●	●

第貳等

氏名	出席割合	算術割合	小試業割合	大試業割合
溝越為吉	九九	九五八三	八七五	八九
石津英治	九八	九五	九二	八一
佐瀬秀三郎	九九	九一八三	九〇	八六
服部讓	八八	八一六七	九一	九〇
廣瀬敬四郎	九八	九五八三	八五五	八九
小澤虎明	一〇〇	九〇	八四	八六
秀島孜郎	一〇〇	七五	八四	八九
森田文藏	七〇	八七五	七九	七五
國府寺則順	九七	五三七五	八三五	七五
南摩昇二郎	八八	四三三三	七七	八五
美澤進	七二	●	八八	八九
佐竹静枝	七七	二三三三	七三	七七
岩井締	七七	●	八三	七七
西村熊太郎	六六	●	七九	八〇
小管隆治	七四	三六六七	四四	六一
白藤道史	四八	三九五八	四五	五六
松島剛	七二	六八三三	七一	●
古賀静吉	二三	●	四〇	七八
小野三四郎	七一	八三三	六〇	四九
二宮勝也	四八	●	五四	四〇
伊達純三	五六	一六六七	五八	●

第三等ノ一

氏名	出席割合	算術割合	小試業割合	大試業割合
古田新六	九二二五	九六五	九七五	九〇
三浦元太郎	一〇〇	一〇〇	九〇五	八四
小倉實三	九五	九八六	八三五	八二
綾部文藏	一〇〇	九九	八六五	六八
中村重就	九一七五	九二八二	七六五	八二
猪子鐸太郎	八五五	七三六六	九〇	八六
服部光吉	八四七五	八〇二一	八〇五	八二
佐藤佳馬	一〇〇	一〇〇	六四	七七
小野秀榮	九二五	八四一八	八五	六七
桐野利耕	八三七五	九六一	七一五	六四
淺澤源八郎	九三五	六九五一	八二五	七二
笠原惠	九四	五五五五	六五五	六九
中井恒介	五五	●	九八五	八七
田中武修	七七	八〇四三	六一	四四
三輪信一郎	一〇〇	●	七二	七九
飯野虎雄	八〇	三六四六	三七	七七
松浦正重	一〇〇	●	六八	七四
高柳敬勇	一〇〇	●	六四	七〇
田代丈吉	八一五	七九〇三	五〇五	●
大石唯四郎	七五	六二四	五〇	●
大山慊	九二	四四九〇六六	三七三三三三	三〇
秋澤貞風	六一二五	一七	五三五	●
大河内輝剛	六九	二五	二一	●
近藤英作	七三	一	二四	●
濱田温徳	七八	二	●	●
淺野乾	八三五	二	●	●

第三等ノ二

氏名	出席割合	算術割合	小試業割合	大試業割合
茂木吉次	一〇〇	九九	一〇〇	八八
神津國助	一〇〇	九六五	一〇〇	八七
小栗香平	九五	九六二三一	九五五	八〇
田中米作	九一	九九	九二	七八
栗林勝太郎	一〇〇	九六五	九四	七八
管友輔	九五五	九七	九四	七三
眞中直道	八七三	九四二三一	九一五	七八
松本福昌	九七	九三五	九四	七二
渡邊魁	九一	一〇〇	九四	五五
武川季材	九二	九六五	九〇	五四
池邊作郎	一〇〇	九一	九〇五	四七
橫田傳	九一	九九	七三	五六
橋口源太郎	一〇〇	九三七二	六七	六七
久津間和順	八〇	七一〇六	八七	五七
齋藤斐	八六	九八	五八	五〇
武田勇藏	八八	七七九四	六五	五六
石川正吉	四六	六六二二	七二	五八
河野通唯	七五	六八	五四五	六四
相馬誠胤	八二	七二六一	六九	四三
松井康載	七四	七〇七八	五七	三四
稻垣長敬	九三	八三九四	四一	三〇
島村鶴集	九〇	二二二四	五四	五八
榊原造逸	六六	二〇	四三五	五九
小川玄次郎	一〇〇	●	六四	五七
松下丈吉	八〇	五五五	四八五	●

第四等

氏名	出席割合	算術割合	小試業割合	大試業割合
萩原静馬	九九	九八五五	九六六六	九七
市川勝太郎	九七	九九七五	九〇五	九八
津田政協	一〇〇	九七一二	九一	九九
大場景明	九五	九五八七	八八五	九七
濱田弘道	九九	九四二一	八九五	九六
加藤幸三郎	一〇〇	九八一六	八五	九五
石澤命世	九八	九八四二	九一五	八八
知識五郎	九九	九八七	八八三	八九
廣瀬楨藏	九九	九五九九	八九	八八
島田種次郎	一〇〇	八九二四	八三	九三
渡邊謙一郎	九六	八七〇五	八四	九三
河北秀之進	八五	一〇〇	七八	八一
染山政	九一	八五五四	八三	八六
赤坂龜二郎	九四	七二三五	八〇五	九四
増井直三郎	六〇	一〇〇	六八	七三
徳弘為章	一〇〇	七七九一	七六五	八五
内林永成	九七	七二九二	八二五	七八
横尾健太	六七	七一七三	六七	九三
古川坂治郎	七八	八二八	七一	七六
野呂巽之助	五五	六九〇二	六八	八九
渡邊達四郎	八一	七一五三	七一	七九
和田孝三郎	九〇	八二〇九	五三	八〇
星野彦三郎	四五	四一五六	六二五	九八
吉武誠一郎	一〇〇	一七二	八四	八八
福岡清一郎	四六	四三	五二	八八
豊岡穏如	●	●	●	七八

第五等ノ一

氏名	出席割合	算術割合	小試業割合	大試業割合
眞々田豊作	一〇〇	九四二八	九四	九一
福島通	一〇〇	九九一六	九七	八三
倉石知藏	九九	九六四八	八九三二	八一
入江太郎吉	一〇〇	九九八七	九五	七九
田中常徳	一〇〇	八二〇六	八六	七九
河鰭敦	九七	九九一六	八二	七四
白石兼吉	九七	九一四三	八六	七二
伊丹春雄	九七	九〇六七	七八	八〇
酒井虎三郎	九八	八八一一	八四	七三
竹崎新助	九八	九七四三	七七	六九
室十一郎	一〇〇	八八五三	八六	六八
田中彝太郎	六八	九〇〇九	七二	七九
川井嘉郎	一〇〇	八〇七二	八〇	八〇
築弟三貞	七〇	六六六三	八七	七四
平松憲寛	六七	●	八七五	七九
阪井勝屯	八五	九三六	五二	●
井上六	六九	●	五三	八〇
志摩嘉則	六四	六三九三	六五	●
竹田義信	五八	●	四四	七七
友田包倍	七四	六五	四六	●
中金倍	四一	●	四〇	六九
上田直太郎	四三	四二五	二五	●
小松三郎	一二	一四二六	二四	●

第五等ノ二

氏名	出席割合	算術割合	小試業割合	大試業割合
中村寛	一〇〇	九四一	一〇〇	八六
永井好信	一〇〇	九六八六	九六	八二
片山哲次郎	九九	九九三四	九七	七六
三原國一郎	九四	八七二八	九六	八六
多田彌三	九一	八六二四	九一	九〇
高島小金治	九四	九二六二	九三	七八
八尾政衛	一〇〇	八五九二	九二	●
曾木眞太郎	九七	八〇五四	九四	八二
原田虎太	九六	九四九	七四	八七
石井長英	九九	九二〇一	八六	七二
渡邊源次郎	九〇	八五七二	七二	九一六七
岩橋讓次郎	九二	八五五八	八三	七六
山口寅次	九六	九六三七	八四	六〇
奥田直之助	九七	八七九三	八〇	七〇
松本茂	九二	七一四九	八一	六六
加藤房吉	九八	八五七	七四	五八
廣根芳衛	九八	八一九	五七三二	七四
齋藤眞太	九九	六六三二	七〇	七四
後藤石太郎	一〇〇	四七七八	七六	五八
川崎維則	六四	二七七二	六九	六〇
石川等	七七	七二七一	五五	●
川上彦四郎	七三	八八一	四八	●
岸幹太郎	五〇	四八五九	四六	●
江川眞純	五六	五一八四	四一	●

氏名	出席割合	算術割合	小試業割合	大試業割合
宮本重光	四一	一九三七	●	三○
久野宗照	三七	八九九	一七	●

科條 大人壹番ノ壹

氏名	出席割合	算術割合	小試業割合	大試業割合
河野拾藏	一○○	九五三四	九三五	九六
加藤政之助	一○○	九二八七	九二五	九二
蜂須賀彦六	一○○	九○三六	九一五	八九
久我平三	一○○	九七六	八七五二	八四五
野田十一郎	一○○	九四三七	八八五	八二
伊藤丈吉	一○○	八三三四	九四	八七
山本喜道	九二	七三一五	九五五	九四
後藤直彦	九八	八四九七	九○	八四
神田之保	八五	九七四二	七四	八六
手塚政太郎	九三	八二三九	七二	八八
佐知兼次郎	九八	六四二六	八四	九一
神尾金彌	一○○	九一五	六一	八六
藁科直太郎	一○○	七七八	七二	八一
佐野春吾	九九	六四二六	七五	九○
岸四郎	九七	八一○二	六四	八二
本間二郎	九四	八四○六	五七五	八二
山本鍋一	一○○	六八○七	七三五	八○
阿部正功	九五	七五五二	六二	八三
高谷政太郎	九八	六四二六	六九	八四
佐々木三郎	九八	七九六	六二	七五
萩原長三郎	一○○	七四○九	六一	七○
板谷茂作	九九	七一三六	五四	七○
七澤遲	八七	五二八五	五六	七八
厚東峯松	九五	五五一	六七	六○
乾緝	一七	一○○	四六五	●
鎌田政記	三二	三三三二	二一	●

科條 大人壹番ノ貳

氏名	出席割合	算術割合	小試業割合	大試業割合
犬養毅	九九五四	九六四	九七	九○
世木公亮	九八八五	九八五	九六五	八七
吉村增夫	九八一六	九四四二	九八五	八○
古渡資秀	一○○	九一八	九四	八六
矢野鞆三	一○○	九五六七五	九二五	七六
青木省三	九七二四	九四四七五	九○	七八
久世敎長	九七二四	九三三五	九八	六五
安場末喜	八二六一	八一八七五	九○	七八
川村忠平	八八五	八三四七六	七四	六一
高頭又市	九二一八	七三五七五	七三	五四
正木久之進	九三五六	八○九五	六五	五二
丹羽長裕	九三五六	七三六七五	七八	四三
木村重堅	九七二四	八八一五	六七	三九
東條信	九六三二	八五一七五	七○	三七
村井經治	九六四	六一八七五	六一	六四
蜂須賀二郎	七三三三	五八六七五	七一	五二
淺井得	四○八	三二	四一	五八
加藤勘助	四○三四	三○八	三九	五○
陶山音治	六四一二	五八六五	四五五	●
安藤直行	四三六四	二五八	三九	三七
栗屋多藏	三二○六	三五二	二四	●
村松民次郎	三八二	三三二五	二三	●

科條 大人貳番ノ壹

氏名	出席割合	算術割合	小試業割合	大試業割合
森本元二郎	一○○	九五	九七	七七
菊永昌一	九六	九○	九六	七二
土宜法龍	九三	九二五	八○五	八三
本多恕忠	八四	八二五	九六	七五
松村新太郎	八四	八三六八	九四五	六八
堤田鶴三	一○○	九二五	八六五	六三
蜷川貞義	一○○	九八三	七八	六五
齋土繼雄	一○○	九三六八	七九五	六六
毛利二郎	九四	八六九八	六七	六六
根岸吟三	一○○	九一九八	八○五	四六
渡邊腆	六九	七○八	七三	六九
武吉常太	一○○	九○八	五三	五八
島田又六	九五	九八三	六四	三五
國枝義光	九七	九○	四六	五二
橋本久太郎	三五	三六	五八	七七
一柳紹念	七○	七二四	二七	六○
中村順一	六六	五六九八	四八	五四
島田仲太郎	九四	七六六	五一	二五
鹽田助郎	九六	八四一	四二	二五
石川正輔	九八	九一一八	二九	二五
大田原靜	八七	四九九	五一	四四
織田長猷	五○	二二	八六	●
林偉吉	五○	四六六	三四	●
池上好三	一四	●	一三	●

科條 大人貳番ノ貳

氏名	出席割合	算術割合	小試業割合	大試業割合
水谷幸太郎	一○○	九七八	九七	九四二五
矢野龜太郎	九九	九六六一	九二五	九四
山崎百四郎	九六	九八○二	一○○	八二
丸毛豐太郎	一○○	九六八	九五	八七五
俣野景憲	一○○	八八○七	九七	八八
前田斗機太郎	九八	八八七二	八七	八七
佐野平九郎	九八	九四二二	九三	六四
三上悦三	九五	八九七四	九六	六○
石川俊在	九八	六六六八	八八	八九五

氏名	出席割合	算術割合	小試業割合	大試業割合
布田政之	八九	八八一一	八三	六八五
青山理三郎	九五	八四八二	九○五	一五
稻村闕次郎	九九	七四一六	五四	五四
堀金治	九○	二四○四	六七	八○
古澤誠幾	四九	四九六一	六五	五六
須長惟七	九五	四九	六四	二五五
石川喜四郎	八○	四九○九	六○	七
島川勇次郎	四九	四一五二	二八	●
津山盛之亟	四○	三六七一	二九五	●
大岡直顯	三五	二○一五	三四五	●
廣谷柾	七三	一五八三	二一	●

科條 大人三番ノ壹

氏名	出席割合	算術割合	小試業割合	大試業割合
田村崇顯	九六	九六三二	九六	九七五
林親興	一○○	九○七五	九三三三	七○五
九鬼匡輔	九六	九五八三	九三三三	六○
黒田定七郎	七九	八三二七	六六六七	七九
横山安貞	一○○	九八七五	六○六七	五八五
伊藤吉二	九四	九七五	八八	三二
一乘奎現	八八	八三三一	七六	六五
安永隆吉	九四	八五二三	五二	二
石橋九郎	六六	五五四七	四四六七	●
大田原勝清	九二	四○○四	五一二三	六二五
飯田幸吉	八六	一八九五	一四三七	●
笠原彜	五六	●	六七二	●

氏名	出席割合
松下基治	一○○
藤田谿	一○○
谷尾範三	九七五
倉石次吾	九六五
管沼凉二郎	八九五
久米民之助	八九
東政德	八九
大峯得三	七九五
岡田泰三郎	六三
富坂利三郎	四四
井氷正太	一○五

童子科第一番

氏名	出席割合	答數割合	小試業割合	大試業割合
井上寛一	九九	九八	九三	八八
折原源十郎	一○○	九八	八六	七八
矢野貞雄	九三	九五	八三	七六
福澤拾二郎	九七	九七	九○	六一
堀秀房	八八	八三	四三	●
福澤一太郎	九七	八九	七二	六四
高木鍈太郎	九七	八○	七七	六七
井上後雄	一○○	八二	七八	四六
小川増吉	一○○	●	五○	八六
高山龍之助	三六	三五	二五	●

童子科第貳番

氏名	出席割合	答數割合	小試業割合	大試業割合
鹽田喜六	一○○	九八○六	九八五	八七五
竹中八太郎	九二五	八九八三	九六五	九三五
弓場政造	九七	八九九五	九二	八八
志賀哲次	一○○	九六九三	九三	七八五
安藤高太郎	九八五	九六九一	八五五	七
由眞清睿	九六三	九一一六	六七	七四五
村上友吉	一○○	八五六五	七二	七○
益田三郎	九二	七二九六	五六四	五○
稻葉鍉次郎	九八	八二二	一四	四五
塚本岩三郎	●	●	●	七○
中村倉次	●	●	●	四七

童子科第三番ノイ組

氏名	出席割合	答數割合	小試業割合	大試業割合
俣野景次	一○○	九四六七	一○○	八四五
田原民次郎	九六	八五七六	九八	九三五
俣野景藏	一○○	九七一七	九五	七二
松本彥次	六二五	六六二一	三四	六三五
安藤仁三郎	九二七五	八三二二	八一	五四
橘高脩吉	九八五	八○一一	三二	六○
杉五一	八○五	四二○二	三六	○
高島鑛橘	三二	一九○一	一一	○
秋田恭次郎	三二	六五	八	○

童子科第三番ノロ組

氏名	出席割合	答數割合	小試業割合
川崎新次郎	一○○	九七五	七八
樋口岩岐	一○○	八九二五	八六
時友市太郎	九六	八六六八	八四
宗村勇二郎	一○○	九一一	七五五
今井金義	九七五	五四一九四	八八
岩間孫次郎	九九	八四九	五八
足立松太郎	九八五	六二五	七八
佐藤松太郎	一○○	八九五	四九
松田鑅三郎	九三	九○五五	四一
三間眞藏	八七	六三三	五八
相馬順胤	五八五	六八	四八
山田宗誠	九九	六二一	三八
南部龍丸	五○	五	●